「古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本」

平成 26 年度～平成 30 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

研　究　成　果　報　告　書

平成 31 年 3 月

学校法人名　学校法人専修大学

大　学　名　専修大学

研究組織名　専修大学社会知性開発研究センター

古代東ユーラシア研究センター

研究代表者　飯尾　秀幸（専修大学文学部教授）

目次

５年間の研究活動の総括

１．はじめに

２．東ユーラシア地域論に関する認識

３．研究１年目における新たな研究方法の発見

４．２年目以降の研究成果

５．データベースの構築と公開

６．若手研究者の育成

７．今後の課題と展望

８．５年間の取り組み

８−１．研究成果公開シンポジウム

８−２．刊行物

８−３．インターネットでの公開

８−４．その他の研究成果等

５年間の研究活動の総括

１．はじめに

本プロジェクトでは、東ユーラシア地域論を新たに導入することで、東アジア世界の歴史的展開の叙述がより豊かになることを示すため、研究方法を提案し、その提案に基づく具体的な歴史研究を行なうことを目指した。

研究を進めるにあたり、具体的な視点として、前プロジェクトである東アジア世界史研究センターの論点であった留学生の役割を「人流」という人・モノの交通・交流に発展させて東ユーラシア地域を検討することにした。また研究プロジェクトを進めるなかで、東ユーラシア地域論の理解のために新たに「中心と周縁」という研究方法を提示し、2 年目である平成 27（2015）年度から具体的な歴史研究を開始した。そこでは、古代において人・モノなどの動きを起因とした、内陸アジア・中国・朝鮮半島・日本列島・ベトナム北部といった地域内にいくつも存在することになる「中心と周縁」諸関係、さらにそれら地域間にも存在した「中心と周縁」関係を中心に、主に考古学・文献史学の両面からできうる限り具体的に歴史事実を明らかにすることを目的とした研究を推進することとなった。

この研究視点・方法・目的をもって、5 年間、研究成果の公開と討論を行なったシンポジウム、新情報の共有と調査のために開催された研究会、研究員による共同調査、研究成果の社会への還元のための刊行物発行、研究に有用なデータベースの構築と公開、市民への公開講座の開講、授業による学生への還元などについて、以下のような試みを本プロジェクトでは積み重ねてきた(巻末に取り組み一覧を掲載した。参照願いたい)。その取り組みを振り返りながら、これまでの研究成果を示し、残された課題も確認しておきたい。

２．東ユーラシア地域論に関する認識

本プロジェクトでは、研究開始以前、東ユーラシア地域論をめぐって、その地域がどこを指すのかといった点をはじめとした問題に対して、センター内での認識の共有に努めた。そこでの共通認識のおおよそは、古代東アジア世界の諸地域（中国・朝鮮半島・日本列島・ベトナム北部）とその世界の歴史に影響を与えた内陸アジア世界、北アジア世界、南アジア世界・東南アジア世界を東ユーラシア地域として設定することにした点である。そこは南アジア世界で生まれた仏教が普及した地域とも重なる。仏教がユーラシア大陸の西側に及んでいないことには何か理由があるはずであるなどという認識もこの時点で抱いていた。ただユーラシア地域を一つの世界として捉えることはできないとの意見も強く出されていた。なぜなら政治・経済・文字・宗教・学問・文化などを共有し、一つの世界として、その歴史的展開が相互に関連しあっている東アジア世界

とは異なり、東ユーラシア地域が一つの世界とは捉えられないと考えたからである。

本プロジェクトが東ユーラシア地域論を提起する理由は、冒頭でも述べたが、あくまで東アジア世界の歴史的展開をより豊かに叙述するためであり、内陸アジア世界・北アジア世界との交通関係で東アジア世界の歴史を捉え直そうとするためであった。しかし研究員の間でこの認識が徹底されておらなかったため、研究プロジェクト名に「古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本」とあるように「東ユーラシア世界」の名称が入り、その一方でセンター名「古代東ユーラシア研究センター」には「世界」が入らないといった現象を生み出してしまった。

しかし、プロジェクト開始後には、東ユーラシアは東アジア世界の歴史的展開を説明するために設定する地域論であることが研究員内で再確認された。それと同時に東アジア世界史研究センターにおいてもち続けていた、東アジア世界史論は中国中心史観と一線を画すべきであるとする歴史認識を本プロシェクトにおいても共有すべきものとして確認された。

３．研究１年目における新たな研究方法の発見

前項の共通認識が、研究開始後における東ユーラシア地域論を研究するための方法の提案に結び付いた。それはプロジェクトの初年度である平成 26（2014）年度に実施された韓国での調査において、研究員相互ではっきり認識されるようになった。その研究方法が「中心と周縁」である。これは板垣雄三が唱える「ｎ地域論」にも影響されたものであった。百済地域のその地理的位置、ならびにその地域の遺跡や出土文物を調査するなかで、百済地域内の王宮とその周縁との関係、ならびに百済と新羅・高句麗などとの諸関係、さらには百済と中国との関係などに、「中心と周縁」関係が重層的に、複合的に存在し、しかもそれが時代的に変化するものであることを見出した。さらに東アジア世界史研究センターにおいて、東アジア世界の形成を希求したのは、制度を創った中国の側ではなく、朝鮮半島・日本列島に存在した諸権力の側であったという論点のなかにあった、それら諸権力の主体的な行動といった議論も、この「中心と周縁」関係論に関連するという認識を得た。またそれは中国内部においても、いくつもの「中心と周縁」関係が重層的に、複合的に存在しているという理解に繋がることになった。

この研究方法と歴史認識は、翌年平成 27（2015）年度末に行なわれた岡山県・兵庫県の調査でより一層深められた。造山古墳、鬼ノ城跡、熊山遺跡、秦廃寺、備中国足守庄荘園関連遺跡、播磨国鵤荘関連遺跡宮山古墳などの調査、およびそれに伴って開催された研究会は、吉備・播磨地域における渡来人集団の定住の実態、さらに渡来系文化の流入過程、ならびに畿内権力との関係などから、聚落への定着によって聚落内の「周縁」に位置づけられた渡来人集団が、時代の経過とともにその「中心」へと変化していく。また吉備・播磨地域に存在した諸権力が、畿内権力との関係性をもちつつ、次第に畿内を「中心」とした権力の「周縁」に位置づけられていく過程などを具体的に浮かび上がらせてくれた。

こうして本プロジェクトの２年目以降の具体的な研究の方向が定まっていった。

４．２年目以降の研究成果

平成 27（2015）年度（2 年目）前半では、ソグド人の中国への流入実態を明らかにし、中国の唐王朝とソグド人とを「中心と周縁」で捉え直し、また馬具が内陸アジア、中国、朝鮮半島、日本列島にどのように移動したのかを検討し、「人流」の実態に迫った。後半では、中国の北魏時代において、当初「周縁」的存在であった北方系の部族が「中心」に変化していく歴史的過程を追究し、また日本列島における古代の出土文物や文献史料から南北という地域的関係の存在を明らかにし、「中心と周縁」関係の議論の幅を広げた。

平成 28（2016）年度（3 年目）の前半では、新出の唐代墓誌を資料として、朝鮮半島（高句麗・新羅・百済）出身者の中国への移動・定着とその生活実態、ソグド人の唐・長安における居住街区の検討を通じて、中国と朝鮮半島、長安での唐人と朝鮮半島の出身者、中国と内陸アジア、長安の唐人とソグド人の関係などを明らかにし、「中心と周縁」関係における重層性・複合性を具体的に見出した。後半では、日本列島の古代・中世における「エミシ」の移配問題、港市である博多の住民区分の歴史的変遷、および鹿児島県南西部での交易拠点と外国人居留地との関係などを事例として、「中心と周縁」関係の時代的変容を具体的に跡付けた。

平成 29（2017）年度（4 年目）前半では、古墳時代における渡来人の住居址、聚落址、墓葬、文物を中心に、朝鮮半島と日本列島の両地域間の双方向的な交流のあり方、朝鮮半島と日本列島西部との交流、さらに東日本における渡来人関連の聚落を分析し、在地社会と渡来人との関係を検討し、「中心と周縁」の多様な関係の実態を提起した。この年に行なった群馬県金井遺跡群に関する調査は、これら研究成果を可視的なものにしてくれた。後半は、ベトナムで発掘された肥前陶磁の移入時代と使用場所についての考察、ならびに前近代ベトナムにおける象とその国家管理の実態、さらに交易品としての象、象と日本との関係を文献資料に基づいて考察した。その後に行なったベトナムの調査において、地域間交易の解明が東ユーラシア地域論にとっても重要な論点であることが再認識された。

平成 30（2018）年度（5 年目）前半は、墓葬の形式という考古学の成果に基づいて 4〜5 世紀における中国の動乱によって引き起こされた漢族の内陸アジアへの移住の実態、および香木の流通ルートを中心に東ユーラシアにおけるソグド人による東西交易の実態、さらに朝鮮半島（馬韓・百済王権）と中国南朝との交流の実態を検討し、前年度にその重要性が再確認された交易を視点として、東ユーラシア内での東西の「人流」の具体的なあり方を議論した。後半では、古代中国とベトナム北部の交州社会、交州社会内部における諸関係の実態、また 13〜14 世紀におけるベトナム北部・中部、インドシナ半島内陸部、東南アジア島嶼部との交易活動の実態、さらには 9〜12 世紀におけるアイヌによる北方地域と東北地方との交易、畿内との関係、大陸との関係などの実態、および 12 世紀の平家政権によって開始された貿易港の整備・宋との交易活動にあらわれる政治的・経済的意義の検討が行なわれ、「中心と周縁」関係の重層的なあり方を検証した。前半が東ユーラシア地域における東西交易を検討したのに対して、後半は同地域東岸における南北交易の実態を明らかにしたことになる。

５．データベースの構築と公開

以上の本プロジェクトでの取り組み、研究内容のほかに、もう一つの大きな成果として、データベースの作成・公開が挙げられる。本センターの前身である東アジア世界史研究センターからの継続事業である「古代東アジア世界史年表」データベースでは、継続的な校訂・補正作業が行なわれ、その結果より完成度の高いものになり、その成果をWeb上で公開している。また、本プロジェクトから新たに「古代東ユーラシア来日外国人データベース」と「渡来系遺跡・遺物データベースー東日本編ー」の作成が開始された。これらは日本列島における人の移動と定着を研究する上で有用なものとなる。

６．若手研究者の育成

さらに本プロジェクトの目標の一つに若手研究者の育成がある。本プロシェクトでは、この 5 年間にＲＡ、ＰＤとして 6 名を採用した。このうちＲＡの 1 名が平成 29（2017）年 4 月に博物館の非常勤学芸員に、またＲＡの 1 名が平成 30（2018）年 4 月に石川県立美術館の学芸員として採用された。また、平成 29（2017）年 6 月にＰＤの 1 名が歴史学会の全国組織である歴史学研究会委員会委員に就任し、さらに同年９月よりＲＡの１名が韓国の大学の大学院博士課程に留学した。平成 30（2018）年度にはＰＤの 1 名が本学大学院文学研究科に博士論文を提出し、学位を取得した。このようにＲＡ、ＰＤは研究者として着実に育っている。これらは本学の大学院生の研究意欲を高める結果ともなっている。これらの点も成果として報告したい。

７．今後の課題と展望

本プロジェクトでは、東アジア世界の歴史叙述をより豊かにするために東ユーラシア地域論の導入に有効性があることを、新たな研究方法を提示したうえで、その方法に基づいた具体的な歴史学研究を継続しつつ実証してきた。その研究方法としての「中心と周縁」関係論には、その重層的、複合的な関係、さらにその関係の歴史的変化、ならびにその変化に関連した「中心」「周縁」のそれぞれの権力の主体性といった特徴が存在することを明らかにしてきた。またこうした「中心と周縁」の諸関係が様々な地域内部に存在していたと考える視点は、東アジア世界史論にもあった中国中心史観とは別な歴史叙述を実現することに繋がることにもなるとの認識にも到った。ただこの視点での具体的な歴史研究は、その検討分野が広いこともあって、上述した本プロジェクトにおける 5 年間の諸研究においても、まだ緒についたばかりである。そのなかにあって、とりわけ東ユーラシア地域論の視点から、すなわち「中心と周縁」諸関係という論点に基づいて、

あらためて東アジア世界を具体的に再検討し、より豊かな東アジア世界史を構成する必要があることを痛感している。したがって残された問題、新たな課題も多く、東アジア世界史研究センターから引き継いだ本センターにおける研究拠点としての役割はますます重要となり、これからも継続・発展させていかなければならない。

今後、本センターは本学の社会知性開発研究センターにおいて、規模を小さくしながらも研究拠点として継続されることとなった。この後継センターの研究テーマは、上記の問題意識に基づいて、「東ユーラシアにおける東アジア世界－中心と周縁を視点として－」とした。これを拠点として、東アジア世界と東ユーラシアとの諸関係を検討し、上述した残された問題や新たな課題を追究しつつ、東アジア世界の歴史的展開をより豊かに叙述していこうと考えている。

８．５年間の取り組み

８-１．研究成果公開シンポジウム

【平成 26（2014）年度】

■第１回シンポジウム

テーマ：「古代東ユーラシア地域と朝鮮・日本」

日　時：平成 26（2014）年 11 月 29 日（土）13：00～17：00

場　所：専修大学神田校舎 2 号館 301 号教室

参加者：151 名

内　容：

〈趣旨説明〉

飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉

「鮮卑の祖先窟の伝達と突厥の祖先窟の伝承」

片山　章雄（東海大学教授）

「渡来人の東国移配と高麗郡･新羅郡」

荒井　秀規（藤沢市郷土歴史課）

「５世紀後半における東国の渡来人」

土生田　純之（古代東ユーラシア研究センター研究員／専修大学教授）

〈討　　論〉

【平成 27（2015）年度】

■第１回シンポジウム

テーマ：「古代東ユーラシアにおける『人流』」

日　時：平成 27（2015）年 7 月 18 日（土）13：00～18：00

場　所：専修大学神田校舎 2 号館 302 号教室

参加者：214 名

内　容：

〈趣旨説明〉

飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉

「ユーラシアの民族移動と唐の成立ー近年のソグド関係新史料を踏まえてー」

石見　清裕（早稲田大学教授）

「日本列島への馬の導入と馬匹生産の展開－東日本を中心に－」
堀　　哲郎（宮城県栗原市教育委員会）

「古代東ユーラシアの馬文化－モンゴル・中国・韓国を中心に－」
張　　允禎（韓国・慶南大学校教授）

〈討　　論〉

■第 2 回シンポジウム
テーマ：「古代東ユーラシアにおける中心と周縁」
日　時：平成 27（2015）年 11 月 7 日（土）13：00～17：00
場　所：専修大学神田校舎 2 号館 302 号教室
参加者：195 名
内　容：
〈趣旨説明〉
飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉
「東アジア古代における『中華』と『周縁』についての試論」
川本　芳昭（九州大学教授）

「国際交易と列島の北・南」
田中　史生（関東学院大学教授）

〈討　　論〉

【平成 28（2016）年度】
■第 1 回シンポジウム
テーマ：「古代東ユーラシアにおける『人流』と地域社会」
日　時：平成 28（2016）年 7 月 16 日（土）13：00～18：30
場　所：専修大学神田校舎 2 号館 302 号教室
参加者：204 名
内　容：
〈趣旨説明〉
飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉
「新出墓誌とその重要性―大唐西市博物館所蔵墓誌を中心に―」
胡　　戟（中国・元陝西師範大学教授）

「唐における高句麗・新羅・百済人の活動とそれに関する史料」
拝　　根興（中国・陝西師範大学教授）

「新出墓誌から見る入唐西域人の活動」
栄　　新江（中国・北京大学教授）

「古代東アジアにおける政治的流動性と人流」
河内　春人（明治大学・中央大学・立教大学非常勤講師）

〈討　　論〉

■第２回シンポジウム
テーマ：「東ユーラシアにおける移動と定着」
日　時：平成 28（2016）年 11 月 19 日（土）13：00～17：30
場　所：専修大学神田校舎 2 号館 301 号教室
参加者：157 名
内　容：
〈趣旨説明〉
飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉
「日本古代のエミシ移配政策とその展開」
武廣　亮平（日本大学教授）

「中世国際貿易都市『博多』の調査成果」
田上 勇一郎（福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課）

「中世初期日本国周縁部における交流の諸相」
柳原　敏昭（東北大学教授）

〈討　　論〉

【平成 29（2017）年度】
■第１回シンポジウム
テーマ：「古墳時代の渡来人－西と東－」
日　時：平成 29（2017）年 7 月 15 日（土）　13：00～17：30
場　所：専修大学神田校舎 2 号館 302 号教室
参加者：382 名
内　容：
〈趣旨説明〉
飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉
「日韓交流と渡来人－古墳時代前期以前－」
武末　純一（福岡大学教授）

「古墳時代の渡来人－西日本－」
亀田　修一（岡山理科大学教授）

「古墳時代の渡来人－東日本－」
土生田　純之（古代東ユーラシア研究センター研究員／専修大学教授）

〈討　　論〉

■第 2 回シンポジウム
テーマ：「ベトナム・日本の交流よりみた前近代東ユーラシア」
日　時：平成 29（2017）年 11 月 18 日（土）　13：00～17：30
場　所：専修大学神田校舎 2 号館 302 号教室
参加者：76 名
内　容：
〈趣旨説明〉
飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉
「ベトナムにおける日本前近代史研究」
ファム・ホン・フン（ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学講師）

「ベトナムにおいて発掘された 17 世紀の肥前焼き物」
ダン・ホン・ソン（ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学講師）

「象を通じてみた越日交流」
ファン・ハイ・リン（ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学准教授）

〈討　　論〉

【平成 30（2018）年度】
■第 1 回シンポジウム
テーマ：「古代東ユーラシアの国際関係と人流」
日　時：平成 30（2018）年 7 月 14 日（土）　13：00～17：30
場　所：専修大学神田校舎 2 号館 302 号教室
参加者：239 名

内　容：
〈趣旨説明〉
飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉
「内乱と移動の世紀－4～5 世紀中国における漢族の移動と中央アジアー」
關尾　史郎（新潟大学フェロー）

「ソグド人の交易活動と香木の流通－法隆寺伝来の香木を手がかりとしてー」
荒川　正晴（大阪大学教授）

「古代東アジアの文物交流－馬韓と百済を中心にー」
成　　正鏞（韓国・忠北大学校教授）

〈討　　論〉

■第 2 回シンポジウム
テーマ：「東ユーラシア地域論の現在－交流・交易からみた北と南－」
日　時：平成 30（2018）年 11 月 17 日（土）　10：30～17：30
場　所：専修大学神田校舎 2 号館 302 号教室
参加者：175 名
内　容：
〈趣旨説明〉
飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈講　　演〉
「後漢・三国政権と交州地域社会」
新津　健一郎（東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC）

「大越国陳朝期の交易と海域アジア」
菊池　百里子（人間文化研究機構総合情報発信センター研究員）

「9～11・12 世紀における北方世界の交流」
蓑島　栄紀（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）

「平家政権の日中間交渉の実態について」
髙橋　昌明（神戸大学名誉教授）

〈討論・総括〉

８-２．刊行物

【平成 26（2014）年度】

■「古代東ユーラシア研究センター年報」第１号　　平成 27（2015）年 3 月刊行

【平成 27（2015）年度】

■「古代東ユーラシア研究センター年報」第２号　　平成 28（2016）年 3 月刊行

【平成 28（2016）年度】

■「古代東ユーラシア研究センター年報」第３号　　平成 29（2017）年 3 月刊行

【平成 29（2017）年度】

■「古代東ユーラシア研究センター年報」第４号　　平成 30（2018）年 3 月刊行

【平成 30（2018）年度】

■「古代東ユーラシア研究センター年報」第５号　　平成 31（2019）年 3 月刊行

８-３．インターネットでの公開

■古代東ユーラシア研究センターホームページ

センター概要・シンポジウム等イベント情報・出張調査報告を随時更新

URL：http://www.senshu-u.ac.jp/eurasia/

■専修大学学術機関リポジトリサイト SI-Box

刊行した年報を PDF ファイルにて掲載し広く公開

URL：http://ir.acc.senshu-u.ac.jp/

■「古代東アジア世界史年表」

日本・中国・朝鮮半島相互の対外関係に関する事項を史資料から集成し、この典拠となった史資料を参照できるよう併せて収録したデータベースを作成し、上記ホームページで公開している。

URL：http://www.senshu-u.ac.jp/~off1024/database.html

■「渡来系遺跡・遺物データベースー東日本編ー」

URL：https://www.senshu-u.ac.jp/eurasia/database-k-top.html

■「古代東ユーラシア来日外国人データベース」

URL：https://www.senshu-u.ac.jp/eurasia/database-n-top.html

＜これから実施する予定のもの＞

■「中国出土墓誌データベース」の作成

８－４．その他の研究成果等

研 究 会

【平成 26（2014）年度】

■第１回研究会

テーマ：「朝鮮半島からの渡来人と日本列島内に形成された渡来人コミュニティの研究」

日　時：平成 26（2014）年 12 月 16 日（火）12：20～13：00

場　所：専修大学生田校舎 6 号館 社会知性開発研究センター事務課

内　容：

〈講　　演〉

「韓国調査をめぐって－百済地域の墳墓・王宮跡・仏教遺跡」

高久　健二（古代東ユーラシア研究センター研究員／専修大学教授）

■第２回研究会

テーマ：「ヴェトナム史研究の動向」

日　時：平成 27（2015）年 2 月 23 日（月）13：30～14：30

場　所：専修大学生田校舎 6 号館 社会知性開発研究センター事務課

内　容：

〈講　　演〉

「日本におけるヴェトナム史研究」

山田　兼一郎（古代東ユーラシア研究センター／リサーチ・アシスタント）

【平成 27（2015）年度】

■第１回研究会

テーマ：「古代東ユーラシアにおける馬具」

日　時：平成 27（2015）年 7 月 16 日（木）16：30～18：00

場　所：専修大学生田校舎 9 号館 ゼミ 95G

内　容：

〈講　　演〉

「中国・内モンゴルにおける馬具の変遷について」

張　　允禎（韓国・慶南大学校教授）

■第２回研究会

テーマ：「岡山渡来人関連遺跡研究の動向」

日　時：平成 28（2016）年 1 月 26 日（火）13：30～14：40

場　所：専修大学生田校舎 6 号館 社会知性開発研究センター事務課

内　容：
〈講　　演〉
「吉備・藩磨における渡来系資料の概要」
鈴木　広樹　（古代東ユーラシア研究センター／リサーチ・アシスタント）

「瀬戸内海沿岸における古代地域史研究の紹介」
山田　兼一郎（古代東ユーラシア研究センター／リサーチ・アシスタント）

■第３回研究会
テーマ：「吉備・播磨の渡来人（１）」
日　時：平成 28（2016）年 2 月 4 日（木）18：00～20：00
場　所：サントピア岡山総社　会議室
内　容：
〈講　　演〉
「古代の吉備－対外交流を中心に－」
亀田　修一（岡山理科大学教授）

■第４回研究会
テーマ：「吉備・播磨の渡来人（２）」
日　時：平成 28（2016）年 2 月 5 日（金）17：00～19：30
場　所：姫路キヤッスルグランヴィリオホテル　会議室
内　容：
〈講　　演〉
「古代国家形成期の王権と地域社会」
古市　　晃（神戸大学准教授）

「古代播磨の地域社会構造と倭王権の地域支配－『播磨国風土記』の神話を素材にして－」
坂江　　渉（兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室研究コーディネーター）

【平成 28（2016）年度】
■第１回研究会
テーマ：「西安西市出土墓誌を巡って」
日　時：平成 28（2016）年 7 月 17 日（日）13：00～16：30
場　所：専修大学神田校舎 7 号館 782 教室
内　容：
〈講　　演〉
「西市博物館蔵墓誌の概要」
胡　　戟（中国・元陝西師範大学教授）

「西市博物館蔵墓誌の内容」
拝　根興（中国・陝西師範大学教授）

「西市博物館蔵墓誌の活用」
栄　新江（中国・北京大学教授）

■第２回研究会
テーマ：「古代東ユーラシア研究センター研究プロジェクトの意義と展望」
日　時：平成 29（2017）年 1 月 30 日（月）13：00～17：30
場　所：専修大学神田校舎 1 号館ゼミ 52 教室
内　容：
〈講　　演〉
「日本古代史研究と東ユーラシア」
鈴木　靖民（國學院大學名誉教授・横浜市歴史博物館館長）

「東ユーラシアにおける諸族の動向」
窪添　慶文（お茶の水女子大学名誉教授）

「渡来人に関する考古学研究」
亀田　修一（岡山理科大学教授）

「中国湖南省出土の律令関連簡牘の調査」
多田　麻希子（古代東ユーラシア研究センター／ポスト・ドクター）

〈外部（第三者）評価委員会の実施〉

【平成 29（2017）年度】
■第１回研究会
テーマ：「ベトナムにおける古代史及び日本史研究の概要」
日　時：平成 29（2017）年 11 月 19 日（日）10：00～13：00
場　所：専修大学神田校舎 7 号館 782 教室
内　容：
〈講　　演〉
「ベトナム考古学の成果と課題」
ダン・ホン・ソン（ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学講師）

「ベトナムにおける日本史研究の成果と課題」
ファム・ホン・フン（ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学講師）

「ベトナムにおける越・日交流史研究の概要」
ファン・ハイ・リン（ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学准教授）

【平成 30（2018）年度】

■第１回研究会

テーマ：「日韓における韓国考古学の現状と課題」

日　時：平成 30（2018）年 7 月 15 日（日）10：00～13：00

場　所：専修大学神田校舎 7 号館 782 教室

内　容：

〈講　　演〉

「近年の馬韓・百済考古学の成果と課題」

成　正鏞　（韓国・忠北大学校教授）

■第２回研究会

テーマ：「日本古代史・中国古代史・考古学からみた東ユーラシア地域論の現在」

日　時：平成 31（2019）年 2 月 7 日（木）13：00～18：00

場　所：専修大学神田校舎 7 号館 771 教室

内　容：

〈講　　演〉

「日本古代史研究と東ユーラシア地域論」

鈴木　靖民（國學院大學名誉教授・横浜市歴史博物館館長）

「東ユーラシア地域論と東アジア世界史論」

金子　修一（國學院大學教授）

「研究プロジェクトの総括と今後の課題」

飯尾　秀幸（古代東ユーラシア研究センター代表／専修大学教授）

〈外部（第三者）評価委員会の実施〉